

大谷大学 自己点検・評価報告書
2015 年度

真宗学科

仏教学科

哲学科

社会学科

歴史学科

文学科

国際文化学科

人文情報学科

教育・心理学科

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
読む力・考える力・書く力の向上に向けた、演習Ⅰ・演習Ⅱにおける指導の充実。	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
演習Ⅰにおいては、親鸞の生涯と基本的な思想を学ぶ中で、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。	
<p>○様々なレポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5月、親鸞ゆかりの旧跡を訪ね、調べたことと訪れての感想をレポートにして提出させる。 ・5月、新入生歓迎講演会を実施する。感想をレポートにして提出させる。 ・後期、学外講師を招いての特別講演会と座談会を実施する。感想をレポートにして提出させる。 ・各クラス指導教員間で、レポートの内容を確認し、学生指導に活用する。 <p>○前期後期の期末テストでは論述問題を中心に出题し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。</p> <p>○後期初めに、前期末テストの答案を返却し、前期の学びを振り返る機会にする。</p> <p>○適宜、授業時に小レポートを課し、添削の上返却し、次回授業時に振り返りの材料として活用する。</p>	
演習Ⅱにおいては、法然の『選択本願念仏集』を読解することを通して、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。	
<p>○第1学年必修授業「専門の技法」(学科導入)において身につけた漢文読解能力を活用し、漢文テキストを読解していく。具体的には、『真宗聖教全書』をテキストに、法然著『選択本願念仏集』を素読し、書き下し文および現代語訳を作成しながら授業を進める。</p> <p>○漢文読解に必要な漢和辞典の活用法、仏教関係の辞書の活用法を随時、指導する。</p> <p>○前後期末のテストでは、論述問題を課し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。</p> <p>○レポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏期休暇中に課題図書(真宗関係の書籍)を読み、後期初めの授業時にレポートを提出させる。指導教員はレポートを読み、コメントを付して学生に返却する。 <p>○比叡山フィールドワーク</p> <p>学習意欲の向上を願いとし、2012年度以降実施してきた比叡山登山フィールドワーク(法然・親鸞の足跡を巡る)は、その効果が認められるので、2015年度も引き続いて実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習を行う。 ・登山後に感想レポートを課す。 ・4名の指導教員は感想レポートの提出状況を相互に確認し、登山・諸堂巡りや感想レポートを通して知り得た学生に関する情報を共有し、担当クラスだけではなく、第2学年の学生全体の指導に責任をもって当たるようにする。 ・上記の内容を会議において学科全体にも周知する。 	

2. 【2015 年度の達成状況報告】

演習Ⅰについて

○行動計画は全クラス共通して全て実施できた。各行事の詳細は以下の通り。

・新入生歓迎講演会の実施について

日時：5月19日（火）13:00~14:30（1307教室）

講師：加来雄之氏（大谷大学教授）

講題：「真宗の学び—如来のなかの自分を学ぶ—」

・特別講演会および座談会について

日時：11月17日（火）13:00~14:30 講演会（メディアホール）

講師：真城義磨氏（前大谷中・高等学校校長、真宗大谷学園専務理事）

講題：「学ぶこと・分かること」

*4限目（14:40~16:10）に5班に分かれて座談会を実施。（響流館演習室1・3および講堂棟談話室1~3）

演習Ⅱについて

○行動計画は全クラス共通しておおむね実施できた。比叡山フィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）の詳細は以下の通り。

・比叡山フィールドワークについて

11月7日（土）9時15分大学集合、大型バス2台で北山通と白川通の交差点まで移動、その後雲母坂から比叡山を登り、延暦寺境内の諸堂を巡った後、午後2時に現地解散。

○演習Ⅰ・演習Ⅱとも、レポートの内容については4名の指導教員が他クラスのものも共有し、学生指導に活用できた。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

昨年同様、演習Ⅰ・演習Ⅱとも、文章能力の向上を意識して様々なレポート課題や期末テストにおける論述問題を課し、学生の文章能力の向上について教員間で確認した。また、授業時の小レポートを次回授業時にフィードバックしたり、前期末テストの答案を添削の上、返却したりすることによって、学びを振り返る機会を与えることができた。

各クラスの指導教員間で、学生の状況を共有することができた。

第1学年の学外講師を招いた講演会と座談会についても継続した取り組みであり、学生のレポートからは、普段の演習Ⅰの授業とは異なった幅広い視点から真宗とは何かを考えたり、あるいは自己をみつめる良い機会となっていることが窺えた。座談会における発言やレポートを通して学生の関心や考えを教員が理解する貴重な機会ともなった。

第2学年の比叡山登山とフィールドワークも継続した取り組みであるが、終了後の学生のレポートによれば、初めて比叡山に登った者も多く、親鸞の足跡を自らたどることを通して、その生涯と思想について主体的・共感的に考える機会となっている。また一緒に山道を歩く中で学生と教員、学生同士の距離が縮まり、より細やかな指導のための関係作りに役立っている。

また、今年度は新たに第 2 学年の学生に対しては、夏期休暇中に課題（読書感想文）を課した。学生のレポートからは、現代において親鸞思想を学ぶことの意義が確かめられていることが読み取れた。第 1 学年での学びを再確認し、継続していく上で今回の課題は効果があったと認められる。

[改善すべき事項]

第 2 学年に課した夏期休暇中の課題について、提出されたレポートを添削して返却したクラスとそうでないクラスとがあった。後期初めの指導について、教員間で確認するという課題が残った。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1 学生レポート 演習 I 「六角堂の説明」（親鸞の旧跡を訪れてのレポート）2 部

2 学生レポート 演習 I 「新入生歓迎講演会の感想」2 部

3 学生レポート 演習 I 「特別講演会・座談会の感想」4 部

4 学生レポート 演習 II 「比叡山フィールドワークの感想」3 部

5 「比叡山フィールドワーク行程表」1 部

6 「第 2 学年 夏期休暇 課題について」1 部

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

レポートを書く作業を通じて自らの学びを振り返ることは重要な教育方法と考えられ、それについて丁寧に行動計画を立て、一つ一つ実施されたことが確認できる。学生のレポートを添削するのは大変な作業だと思われるので、ややばらつきがあるのは仕方がないであろうが、たとえば添削ではなく授業の中で取り上げたり、面談に利用するなどの方法も考えられたのではないだろうか。成果は上がっているが、以上の改善点について、より一層の効果を期待する。

<自己評定> S	<委員会評定> S
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
第 1 学年から第 2 学年への移行時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2014 年度においてその効果が確認できたので、2015 年度も、第 1 学年から第 2 学年への接続や展開のために、第 1 学年の「学習計画レポート」を踏まえて第 2 学年冒頭での面談指導を年度初めに実施する。</p> <p>○第 1 学年の春休みに、3 つの課題（①一年間の学びを振り返る。②学びにおける疑問や課題を整理する。③これからの学習計画を記す。）の「学習計画レポート」（1,000 字以上）を課す。</p> <p>○レポートは、第 2 学年初めのクラス別懇談会時にクラス指導教員に提出する。</p> <p>○指導教員は、提出されたレポートを踏まえて、学生に対する面談指導をオリエンテーション期間中に実施する。面談指導に際しては、必要に応じて第 1 学年の指導教員と連絡を取り、学生の実情を把握した上での学生指導を心がける。</p> <p>○面談指導に際しては、学生の状況を見ながら履修モデルも活用する。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>○行動計画は、全クラス共通して全て実施できた。</p> <p>・春期休暇中のレポート課題を学年初めのオリエンテーションにおいて提出。その内容をもとに個人面談を行い、きめ細やかな学生指導を行った。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>昨年度から継続している取り組みであるが、レポートの作成は、学生自身にとってこれまでの学習を振り返ると共に今後の学習を考える好機となっていることが今年度も確認できた。また、そのレポートを踏まえての面談による履修指導は、指導教員にとって学生の実情や関心を把握する良い機会であり、同時に学生と教員との関係作りのきっかけとなり、その後の指導に有効なものとなっている。</p>	
[改善すべき事項]	
特になし	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
1 春期休暇課題指示のプリント（学生による書き込みあり）1 部	
2 課題レポート 2 部	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

1 学年から 2 学年への進級時の休みを利用してレポートを書かせ、それを元に新年度に面談をして各学生への対応を行ったことは高く評価できる。またその内容を学科の教員間で共用していることも、教員それぞれの裁量に任せない点で評価できる。今後もこの取り組みを続けていただきたい。ただし、状況報告で「きめ細やかな」という表現は、自己評価の言葉としては不適切ではないかと思われる。

<自己評定> S	<委員会評定> S
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
第 2 学年後半の指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2014 年度に効果が確認できたので、2014 年度の改善点を踏まえて、2015 年度も学生が学科および大学における学びを体系的にイメージできるように履修指導をする。</p> <p>○上記の趣旨に則り、第 2 学年の後半に、第 2 学年から第 3 学年に向けての面談指導を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第 3 学年以降の履修に関する指導を、第 2 学年年度初めの面談指導やその際に使用した「学習計画レポート」も踏まえながら、実施する。 ・教員は学生の学習状況を把握する機会とし、学生には入学後の学びを振り返らせる機会とする。 ・第 3 学年でのゼミ決定や、可能ならば卒論も視野に入れて面談を行なう。 ・第 3 学年からのゼミに関する情報を提示する。 ・ゼミ担当教員のオフィスアワーを積極的に利用して、相談に行くように促す。 ・第 3 学年編入の学生の指導については、学年初めのオリエンテーションにおける「指導教員決定及びゼミ懇談会」の際、編入生を対象とした説明の機会を設ける。そのことを通して、ゼミ決定やゼミでの学習に戸惑うことがないように配慮した指導を行う。 <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>○行動計画は、全クラス共通して全て実施できた。</p> <p>個人面談では指導教員が学生の学習状況を把握し、これまでの学びを振り返ることを促し、更にゼミ決定について情報提供や相談にのるなど、きめ細かい指導を行った。</p> <p>また年度初めのゼミ決定のオリエンテーションの際、ゼミ決定等に戸惑うことがないように、編入生を対象として説明の機会を設けた。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>この取り組みは今年度で 2 年目である。指導教員にとっては学生の学習状況を把握し、丁寧な学習指導を行う貴重な機会となっている。また、今年度も第 3 学年のゼミ担当の教員から、ゼミについての相談に第 2 学年の学生が研究室を訪れたという報告があり、引き続き学生にとって有効なアドバイスになっていることが確認できる。更に、第 2 学年の指導教員からは学生との距離が近くなっているとの実感が報告され、この取組の効果があがっていると言える。</p>	
[改善すべき事項]	
特になし	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

ゼミ決定のための配付資料 1部

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

具体的な行動計画が立てられ、それに沿って全学科で目標を達成できたことが分かり、S評価で問題ないと考える。効果も上がっているようであるので、この取り組みをさらに今後も続けていただきたい。ただし、より具体的な記述として、面談は一人何分くらいをかけているのか（まちまちであったとしても）などについて報告があると、よりよいと思われる。

<自己評定> B	<委員会評定> B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
第 3 学年時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」がすべて実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
卒業論文提出までの 2 年間を見通して、学生が各自の課題に基づいて学びを進められるように指導をする。	
<ul style="list-style-type: none"> ・第 2 学年までの学習経過を把握するために、前年度指導教員とゼミ指導教員との連絡会を行う。 ・第 3 学年の当初に、今後の取り組みについて面談指導を実施する。 ・オフィスアワーやゼミ懇談会を利用して、学生の状況を把握するように努める。 ・夏期休暇には、ゼミの進行度合いに応じたレポートを課す。 ・春期休暇には、卒論への取り組みを見据えたレポートを課す。 ・以上の内容については、学科会議において、学科全体で共有する。 	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>○前年度指導教員とゼミ指導教員との連絡会を行い、学生の状況を把握することに努めた。</p> <p>○オフィスアワーやゼミ懇談会を利用して、学生の状況を把握することについては、すべてのゼミにおいて行うことができた。</p> <p>○面談指導および夏期・春期のレポートについては、実施できたゼミとできなかったゼミのばらつきがあった。</p> <p>○学科会議においてゼミごとの状況、学生の様子については、共有する機会を設けた。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>学生の状況把握によって、適切な指導を行う土台ができた。また、学科内において他のゼミの学生の様子を共有することにもつながった。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>ゼミごとの進行度合いに違いがあることもあり、同じような形でレポートを課すまでには至らなかった。次年度に向けての改善すべき課題である。</p> <p>年度当初の面談指導についても、ゼミによってのばらつきがあった。この点も改善すべき課題である。</p>	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

行動計画は概ね実行できたと考えられるが、ゼミによってどのようなばらつきがあったのか、またその理由・原因は何か、具体的に面談にどのくらいの時間をかけたかなど、もう少し具体的な記述が必要ではないかと思われる。目標と行動計画はよいと思われるので、学科内での情報の共有などを通じて、ゼミ間でのばらつきがでないよう、一層の努力を期待する。

<自己評定> B	<委員会評定> B
1. 【2015年度の目標等】	
[目標]	
2016年度開設・新コースに関わる取り組み	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>3つの新コース開設に向けて、以下の取り組みを実施する（思想探究・現代臨床・国際、2016年度新入生より適用）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各コースのカリキュラムを策定する。特に演習Ⅰ～演習Ⅳ、学科導入（専門の技法）の授業内容について重点的に検討を加える。各コースに共通して教授する学びの内容と、各コースにおける独自の学習内容を定めることによって、教育課程を整備する。 ・入学からコース選択に至るまでの指導体制を定める。 ・各部署と連携し、新コース開設の効果的な広報の方法を検討し、実施する。 	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
<p>○定期的に小委員会を開催し、新コース開設以降の学科の教育課程について検討を加えた。特に第1学年と第2学年における教育内容について重点的に話し合った。詳細は以下の通り。</p> <p>○教育課程の整備について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1学年と第2学年は真宗学の基礎を身につける段階として位置づける。そのため、第1学年における学習の中心となる演習Ⅰと学科導入（専門の技法）の教授内容は、全クラス共通で例年通りとする。また、演習Ⅱにおいては、新たな取り組みとして共通テキスト（『歎異抄』）を用いて、親鸞思想を全クラス丁寧に学ぶこととする。 ・3コースに分かれる演習Ⅱのクラス編成（全4クラス）は、現代臨床と国際コースをそれぞれ一クラスとし、思想探究コースを二クラスとする。ただし、学年末に調査する志望状況を見て、柔軟に対応することとする。 ・演習Ⅱの教授内容は共通であるが、サブテキストの使用やフィールドワークの実施など、それぞれのコースの特色を活かした教育活動を行う。そして、学生一人ひとりの関心や課題をより明確にする指導を行っていくこととする。 ・演習Ⅲは、共通テキスト（『歎異抄』）を用いる現行の形式を改めて、演習Ⅱにおける学習状況や学生の様子を踏まえて、各ゼミがテーマや読解テキストを定め、各コースの特色を活かした学習を展開していく。 ・演習Ⅳは、学生が自らの課題に応じた研究発表を行うことを中心とする。4年間の学習の集大成である卒業論文の指導を行う。 <p>○コース選択に至る指導体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コースを選択するに当たって、各コースの趣旨やカリキュラム、また想定される卒業後の進路について第1学年時に学生に周知する。各コースの紹介をねらいとする特別講演会や説明会を開催し、また面談を行うなどして、演習Ⅰ担当教員が責任を持って指導にあたることとする。 	

・第1学年の終わりにコースを決定する。学生は志望コースと志望理由を記した書面を提出し、それをもとに面談を行うなどして、指導教員間による協議の上、コースを決定する。

○広報について

・学科所属教員が各新聞および広報誌において新コース設置の理念を伝えた。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

・第1学年および第2学年の教育内容と指導体制がおおむね定まった。
・定期的に小委員会を開催し、学科の教育内容について話し合うことによって、教員間で課題を共有することができた。

[改善すべき事項]

・演習Ⅱ（2017年度）および演習Ⅲ（2018年度）の授業内容の詳細を定めるまでには至っていない。シラバスの作成を念頭に、授業内容をより具体的に定めていくことが課題として残っている。その際、今後の学部・学科改編も視野に入れて、発展的に継承できるように、各コースのカリキュラムを工夫する必要がある。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- 1 「月刊同朋」（2015年12月号）
- 2 「文化時報」（2015年7月22日1面）
- 3 「中外日報」（1月1日2面）
- 4 「仏教タイムス」（2月4日2面）
- 5 2016 キャンパスライフ（29ページ）

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

2016年度開設の新コースに新入生を迎えるに当たっては、4年間のカリキュラム全体を示すことは必要なことであり、それを行動計画に盛り込むことも理解できるが、実際に4年間の教育課程を全て設定することは難しいであろう。当面、1、2学年の教育体制が整えることができているので、目標達成がやや不十分であるB評定は妥当であると考えます。4年間トータルでの学習過程を内外に示すことは必要であるので、次年度はそれが実現できるよう、なお一層の努力が望まれる。

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015年度の目標等】	
[目標]	
「読み書き」を中心とした演習Ⅰと演習Ⅱ～Ⅲを実施する	
[達成基準]	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 演習Ⅰaでは積尊の生涯と思想について基本的事柄を説明できること、演習Ⅰbでは大乘仏教について説明できること。 2. 演習Ⅱ～Ⅲでは、3コースに即して、自己の課題を発見し、それを探究し、成果を文書で表現できること。 	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 演習Ⅰでは事前にワークシートを学生に配布し、テキストの内容をある程度理解したうえで授業に臨めるよう工夫する。授業ではテキストの不明な箇所を調べ、仏教用語の調べ方などを確認しあうグループワークに重点を置く。 2. 演習Ⅱ～Ⅲでは、3コースに対応した形で、「読む・聞く・調べる・書く」の4要素を中心とした授業の在り方を検討し実施する。 	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
演習Ⅰにおいても、演習Ⅱ-Ⅲにおいても、「読み書き」を中心とした授業システムは実現できた。	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 演習Ⅰでは、あらかじめ授業で用いるテキストを配布し、それをワークシートに基づいて調べて要約するという宿題を課し、授業中にお互いでディスカッションを行うシステムを構築した。 2. 演習Ⅱ-Ⅲでは、方法は担当者によって異なるが、グループワークやテキストの要約を基礎に置いた授業システムを構築した。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
演習Ⅰ、演習Ⅱ-Ⅲにおいても、教員中心ではなく、学生主体の「読む・聞く・調べる・書く」の4要素を養う授業システムを構築できた。	
[改善すべき事項]	
演習Ⅰ、演習Ⅱ-Ⅲにおける「読み書き」の教育システムの構築という視点からすれば、特にないが、日本語表現能力を向上させる工夫は、継続して行わなければならない。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
① -1 仏教学演習Ⅰワークシート1	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

演習Ⅰでのワークシート、Ⅱ～Ⅳにおける学生の自主性の尊重と学生の積極性を引き出す工夫に優れた効果が見られた。

<自己評定> B	<委員会評定> A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
志願者増に向けての広報活動の強化	
[達成基準]	
入学定員を満たすこと	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学科教員による高校訪問を計画的に実施する。 入学センターと連携を取りながら、進路決定が行われる前に近畿地域の高校や全国の関連校などを訪問し、仏教学科の 3 コースを説明する。高校訪問のために、学科独自の資料を作成する。また随時高校を訪問し、広報活動を展開する。 2. 宗門・宗門外の寺院子弟を学科へ導くための方策を実施する。 高校生に仏教学科の魅力を紹介するイベントが開催できるか探り、そのようなイベントが可能であれば、実施する。 3. 仏教学科の 3 コースの内容を啓発することができるような、話題の映画の上映会を企画・実施する。 4. 教員免許状更新講習など、様々な機会を通じて仏教学科の魅力を発信する。 	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
様々な工夫のなかで、2016 年度は入学定員に近い数の学生の入学が見込まれる。	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 入学センターと連携して、学科教員全員が高校訪問を実施した。各種イベント（「高校生のための仏教講座」・映画上映会）のチラシを作成し、高校訪問時に配布することができた。 2. 高校生に仏教の魅力を伝えるイベントとして、8 月には仏教学会主催の「高校生のための仏教講座」を開催した。 3. 映画上映会を春秋 2 回開催した。 4. 教員免許状更新講習では、仏教学科教員 4 名が、計 6 回講師を務め、仏教についての講座を行った。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
高校訪問、「高校生のための仏教講座」、映画上映会、教員免許状更新講習における仏教学講座への出講によって、仏教学科の認知度は若干ではあるが上昇し、学科の定員充足にある程度効果があったと思われる。	
[改善すべき事項]	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校訪問に関しては、入学センターとより緊密に連絡を取り、高校生が進路を決定する以前の早い時期に行うべきである。 2. 宗門・宗門外の寺院子弟を学科へ導くための方策は、今年度検討することができなかつたので、その方策を継続して検討すべきである。 	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

②-1 高校生のための仏教講座チラシ

②-2 映画上映会チラシ

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

行動計画を着実に実行してさらなる改善点も検討している努力は A 評価に値する。

<自己評定> B	<委員会評定> B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
新 3 コースに対応した教育・研究体制の確立	
[達成基準]	
<ol style="list-style-type: none"> 卒業論文指導を中心とした演習Ⅳを構築する。 3 コースすべての教育・研究内容を年度末までに論文化する。 	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 2016 年度から新 3 コースの学生が 4 年生になることを受け、新コースでは演習Ⅳを卒業論文指導の場として位置づけ、卒論テーマ決定、資料の収集と分析、論文作成など、どのように指導してゆくか検討し実施する。 3 コースすべての教育・研究内容を、『仏教学セミナー』などの学術雑誌に掲載する。 	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<ol style="list-style-type: none"> 仏教学科が 3 コース（現代と仏教、文化美術、仏教思想）に再編されて最初の 4 年生が誕生するのが 2016 年度である。この点を踏まえて、論文指導を中心とする演習Ⅳの構築に向けて、各演習Ⅳの担当教員は、それぞれ試行錯誤を行った。しかし、それらの試みを学科全体で共有するまでにはいたらなかった。 3 コースすべてに関わる論文・講演録を『佛教学セミナー』に掲載、あるいは入稿することができた。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<ol style="list-style-type: none"> 各演習Ⅳ担当教員の試行錯誤により、論文指導中心の演習のありかたについては、概ね把握することができた。 3 コースすべてに関わる論文・講演録を公開することにより、3 コースの教育内容の充実が図られた。 	
[改善すべき事項]	
<ol style="list-style-type: none"> 論文指導中心の演習に関する授業運営の方法を演習Ⅳの担当者間で共有して、そのような演習を実現すべきである。 	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
<p>以下、学術雑誌に掲載された現代と仏教、文化美術良コース関連の論文を挙げる。（現代思想コースの論文は、数が多いので省略する。）</p> <p>仏教と社会コース</p> <ol style="list-style-type: none"> 新田智道、「仏教の『スピリチュアル化』について—現代世界における仏教の変容」、『佛教学セミナー』第 100 号、pp. 27-49. ロバート F. ローズ、「この一枚の紙の上に雲が浮かんでいる—チイク・ナットハンの仏教思想について」、『佛教学セミナー』第 100 号、pp. 76-90. 	

文化美術コース

1. 采翠晃、「中国における仏伝受容—漢訳仏伝の変容を通して—」、『佛教学セミナー』101号、pp.1-17
2. ロバート F. ローズ、「アメリカの宗教、アメリカの仏教」、『佛教学セミナー』102号、pp.20-37

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

行動計画は改善点があるものの着実に実行されているが、その成果がはっきりするのは今年度ということで、問題を改善し今年度に成果を上げることが期待する。

<自己評定>B	<委員会評定>B
1. 【2015年度の目標等】	
[目標]	
<p>(1) 1年次においては、客観的に読む力、わかりやすく書く力の養成。</p> <p>(2) 2年次においては、専門的な文章および英語の文献の読み方の基礎を習得させる。</p>	
[達成基準]	
<p>(1) 演習Ⅰにおいて新書程度の哲学的文章を理解する力をつける。論理的な文章で説得できる力をつける。</p> <p>(2) 演習Ⅱにおいては、文庫やそれほど難易度の高くない日本語で書かれた専門的な哲学文献および英語で書かれた基礎的な哲学文献を読む力をつける。</p>	
[行動計画]	
<p>(1) 演習Ⅰにおいては、テキストやディスカッションから理解した内容をレポートなどによって文章化させ、その文章を添削する。</p> <p>(2) 演習Ⅱにおいてはそれぞれのコースの専門的文章、英語文献を講読する。</p> <p>(3) それぞれの演習においてレポートなどを通じて困難を抱える学生を発見し、指導を行う。</p> <p>(4) (3)の学生については、指導教員による指導に合わせて、必要に応じて、学習支援室との連絡を密にして、並行的な指導を行う。</p>	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
<p>(A) 行動計画(1)は、「哲学科演習Ⅰ」各クラスにおいて数回のレポートを課し、ほぼ毎回の授業でディスカッションを課したことから実施できたと考えている。行動計画(2)も、各コースでコースでの学びに関する英語文献の講読を1年ないし半年にわたって課したことからほぼ実施できたと考えている。</p> <p>(B) 行動計画(3)は、ある程度授業に参加できる、あるいは学校に来ることのできる学生については実施できた。教室での授業に参加しにくい学生については指導教員が個人授業をする等の対策を講じた。しかし行動計画(4)を実施したにもかかわらず、教員側からはケアアドバイスが困難な不登校型の学生が少数おり、その意味では行動計画(3)は十分に実施できたとは言えない。</p> <p>(C) 行動計画(4)は、やはり不登校型の学生が残ったことから十分に実施できたとは言えない。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
(A) に関して、レポート作成能力およびディスカッションの能力	
[改善すべき事項]	
(B) (C) に関して、授業に参加できない学生への対応	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
(A) に関して、①2015年度哲学科シラバス、②授業内でのレポート内容、ディスカッションにおける発言内容といった授業中の参加態度についての各教員の印象、および③、②について例年と比較しつつ行った学科会議での検討から。	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

本目標については、達成状況報告から行動計画（３）と（４）における取り組みに課題が残る結果となっている。目標の文言からすると（３）（４）は、その行動計画として一見相応していないように見えるが、ヒアリングから学科における演習の取り組みとして（３）（４）は不可欠であるという認識を確かめることができた。「不登校型の学生」への指導は、非常に難しい課題であるが、目標②、③における課題とも関わるので、引き続き様々な工夫をこらして、積極的に取り組むことを期待する。

<自己評定>C	<委員会評定>C
1. 【2014 年度の目標等】	
[目標]	
初年次における定着率の上昇。	
[達成基準]	
(1) 退学者・休学者が 2014 度より減少すること。 (2) 1 年生の GPA が 2014 度より上昇すること (2014 年度は前期で 1.5 以下が 13 名約 28%)	
[行動計画]	
(1) 授業時の講読、ディスカッション、レポートなどから、学習面での問題の有無を把握する。 (2) 前期中に全学生と面談し、学習・生活面での問題を把握する。 (3) 学習面での問題がある学生については、指導教員による指導に合わせて、必要に応じて学習支援室との連絡も密にして、並行的な指導を行う。 (4) 生活面での問題がある学生については、指導教員による指導に合わせて、必要に応じて、保護者や学生相談室との連絡も密にして、多面的な指導を行う。	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
(A) 行動計画 (1) (2) (3) は、ある程度授業に参加できる、あるいは学校に来ることのできる学生については実施できた。また、教室での授業に参加しにくい学生については指導教員が個人授業をする等の対策を講じた。しかし (4) を実施したにもかかわらず、教員側からはケアアドバイスがほぼ不可能な不登校型の学生が少数おり、その意味では十分に実施できたとは言えない。 (B) 行動計画 (4) については、必要に応じて保護者や学生相談室とも連絡しながら指導を実施した。しかしそうした指導を経た後にも、不登校型の学生が何人か残った。2015 年度の哲学科の 1 年生から 2 年生への進級に際しての留年者は 8 名 (そのうちの休学者は 1 名) となった。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
[改善すべき事項]	
1 年生の留年率が高率であること	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
2015 年度の進級判定資料	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

「初年次における定着率の上昇」という目標のもと、行動計画に基づいて取り組んでいるが、達成状況報告にあるように、留年率が高いという状況については、学科の自己評定通り、Cとせざるを得ない。しかし、「不登校型の学生」への指導は、ケアやアドバイスそのものが成り立ちにくいケースであるので、対応が非常に困難であるケースが存在することも十分理解できる。学科として、さまざまな学生に柔軟に対応しながら、継続して「初年次における定着率の上昇」という目標に取り組むことを期待したい。

<自己評定>A	<委員会評定>A
1. 【2014 年度の目標等】	
[目標]	
卒業論文の提出率の向上、留年率の改善。	
[達成基準]	
2014 年度の 4 年次学生の留年率を改善すること。	
[行動計画]	
<p>(1) 各ゼミで卒論テーマの明確化、文章化などを積極的に指導することに加えて、文章を書くことに自信のない学生を積極的に学習支援室に紹介する。</p> <p>(2) 卒論の具体的な書き方については、総合研究室の助教の先生方にも指導していただく。</p> <p>(3) 過去数年間の留年率の変化を分析し、対策を立てる。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>(A) 行動計画 (1) (3) は実施した。学科会議における (3) の分析結果は、3 年次修了までに十分な取得単位数があって卒業論文に注力できる学生が学力不良を理由にして卒業論文が提出できないという学生はおらず (試問を経ての不合格者はまずない)、むしろ、なんらかの理由で早い時期から単位不足になり卒論作成に注力できない、あるいは、4 年生になってから健康上の問題が生じて卒業論文が作成できないといった理由が大半であった。したがって、各教員が既述のような授業内での指導、あるいは授業外での補助的指導を積極的に実施した。</p> <p>(B) 行動計画 (2) は (現時点からみれば哲学科の行動計画としては適切であったのかどうかの懸念はあるが)、実施した。</p> <p>以上により、2015 年度の卒業不可者は 12 名 (そのうちの休学者は 1 名) となった。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
4 年生の留年率の改善	
[改善すべき事項]	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
2015 年度の進級判定資料	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

行動計画（１）と（３）への取り組みを通し、前年度と比較して留年率が大きく改善されたことが確認できる。特に、過去の留年率の分析と対策に取り組んだことは、次年度以降の取り組みにも活用できる内容であったと考える。今回の成果が、**2015** 年度のみのものではなく、留年率が低い水準で維持できるように、引き続き取り組んでいただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標] 演習Ⅰ・Ⅱについて	
<p>第 1 学年での「学びの発見」や「専門の技法」との関連性をふまえ、基本的な、調べる、まとめる、記述する、発表するという「学びの発見」での作業と、社会学の基本的研究方法を学ぶ「専門の技法」の講義内容を個人レベルに引きつけ習得し、社会学的問題やトピックスを取り上げた文献や資料を判読し、要約や論点の整理といった作業を通じ内容を理解する。</p> <p>第 2 学年ではフィールドワークなどの実証的検討も踏まえ、専門的領域の先行研究や資料の分析整理を行えるようにする。</p>	
[達成基準]	
<p>第 1 学年では少なくとも半期で新書ならば 1 冊以上を精読する。また、理解したことについてレジュメを作成し、レジュメに基づく報告を行う。</p> <p>第 2 学年では、それぞれの専門領域の資料・文献の整理並びに検討の準備を行う。</p>	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰにおいては、講義の目的や狙いを伝え（1 回）各自の問題意識によるグループ分けと問題意識のすり合わせを行い（1～2 回）、各グループにおいて最低 1 冊の文献を取り上げ読む（自宅並びに講義外作業）。読んだ内容からグループ内で考察を深め、グループでの議論をレジュメにまとめたうえでプレゼンテーションを行う（12 回。しかし、問題意識を深め、第 2 学年以降のコース選択やその後の学びを深めていくための、問題意識や問をたてることができるようになるため。講義受講者数によるが最低でも半期に一人あたり最低 60 分はプレゼンテーションやその後のディスカッションの時間を確保したい。これは 18 人以下の演習でなければ実現できない。12 回＝60 分×18 人／90 分）</p> <p>各個人・グループの発表内容と社会学で学ぶということとの関連を整理し、次年度以降の学習の準備について伝える（1 回）</p> <p>第 2 学年では、現代社会学、文化人類学、社会福祉学のそれぞれのコースにおいて、各学生が自己の問題意識に基づく専門的な領域における研究課題を明らかにし、具体的な研究課題に基づく資料、参考文献の収集、先行研究に関する整理を行う。同時に、具体的な社会の事象についての調査、資料の収集をフィールドワークなどの講義により実施し、先行研究の検討を行い、文章として演習もしくは講義時間に報告発表を行う。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>概ね、①第 1 学年社会学科総合演習Ⅰ各クラスおよび第 2 学年演習Ⅱ各クラス等で進めることができた。また、②4 月 8 日に総合演習Ⅰ全クラス合同の取り組みとして、140 名を対象に植物園を散策し、本学の位置する北大路界限、公共施設の位置と役割などを考察した（根拠資料 1）。③実社会の問題と関わる実践活動を行う学外者の講演を、学科企画で催し、演習授業に組み込むかたちで複数実施した。6 月 3 日に NPO グリーンバレー広瀬圭治氏による徳島県神山町の村おこし事例講演を企画。10 月 14 日に京都拘置所所長の講演を、学科公開講演会として企画。これらは演習Ⅲ合同授業としても位置づけ、履修生が聴講した。また、中東・アフリカを中心に活動している報道写真家の写真展と講演会を企画したが、講演会（12 月 15 日）は総合演習Ⅰクラス合同授業としても位置づけ、履修生が聴講し</p>	

た（根拠資料 2）。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

- ① 基本的な読み書きの力をつけつつ、プレゼンテーションをする力を養うことに注視した内容で進め、概ね目標は達成している。
- ② 本学で社会学を学ぶ学生として、地域の様子や公共施設の位置や役割などに関心を持つことは、今後のフィールドワークなどの実践的な演習を進める上で基本と考えている。この点では試験的な試みであったが概ね目標を達成した。
- ② 拘置所の現状と課題についての現所長から講演は、ステレオタイプのイメージを持ちがちな対象について認識を新たにすることで、学生たちが自分たちの身の周りの、しかし見えない制度について、考えるきっかけとして意味があった。大瀬氏の講演については、インパクトのある写真や語り接したことにより、今日地球上で起こっている理不尽な戦争被害、および事実を知り考えること、伝える仕事への関心を喚起する上で効果があった。

[改善すべき事項]

- ① 各学年とも学生総数が定員より 20 名ほど多く、上学年の前年度未履修者の加入で、さらに人数は膨らみ、計画的な授業設計を困難にしている。1 クラス 10 数名に抑えることが理想だが、そうすると学年毎のクラス数が増え、学科としての連携や統一性の維持が難しい。たとえば、第 1 学年は 8 クラスとなり、クラスを構成する学生の個性や能力もかなりばらつきがある。しかし、昨今の多忙化のなか、担当教員間の情報交換や調整をする時間がなかなか取れない。メーリングリストの活用等で、学科教員間はふだんからかなり連絡が取りあえているが、連絡事項・協議事項が多すぎて、授業運営の情報や意見調整は後回しになってしまう。学生実人数に見合う学科教員数を確保した上で、役割分担や連絡体制の強化を図る必要がある。また、演習であるにも関わらず、ロの字型の演習室が確保できないクラスが少なくない。教室のありように授業運営はかなり規定される面があり、改善が望まれる。
- ② 外部講師招聘講演実施等につまわる諸事務・謝礼提供等に関する支援制度の充実が望まれる。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1. 社会学科総合演習合同企画チラシ（京都府立植物園）
2. 社会学科公開講演会（京都拘置所所長 岡本昌之氏）チラシ、大瀬二郎氏写真展&講演会チラシ

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

学生数増加に伴う授業運営に苦慮されるなか、フィールドワークや外部講師による講演などを積極的に企画し、1,2 年生の早い段階から学科の専門的学習への動機づけを高める試みは大変評価できる。ただし、これらの活動後、レポートを書いたり、体験による学びや気づきを演習内で共有したりなどの振り返りが実施されたかは本資料では不明である。イベント的な企画は、学生の意識向上に有効ではあるが、一過性の学びで終わる場合も多いので、読み書き、プレゼンテーションといった演習での基本的な活動との接続も必要なことと思われる。

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
「就職力」の向上	
[達成基準]	
仕事や就職に対する関心を、「知る」、「調べる」、「体験する」など具体的行動へ結びつけることのできる学生を増やす。	
[行動計画]	
NPO 法人あったかサポートによる講演会及び演習を実施する。特に就職活動を始める 3 年生の参加を呼び掛ける。	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
NPO 法人あったかサポートによる講演会「働くことと人権—アルバイトから何を学ぶのか、その際に注意したいこと」を実施（11 月 5 日、講演＋質疑で 90 分間）。ブラックバイトなどの事例を通じて、「社会に出ること」の意味を学生一人ひとりが再考しつつ、就職への意識を高める機会を設けた（参照【根拠資料】1）。対象は 1～3 年生で、受講学生から個人的に寄せられる感想報告などからも、高い効果があったことが確認された。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
就職活動への入り口部分に相当する「知る」「調べる」といった事項に関しては、講義形式でも十分に高い効果を上げられた。【根拠資料】2,3,4 に示される通り、実際の労働条件通知書（一例）や新聞記事などの事例を組み込んだ、実践的かつ社会学的にもかなり高度な内容の講演であり、特に 1 年生がこうした知識を入学後の早い段階で得るのは、非常に意義深いことだと考える。	
[改善すべき事項]	
知識を得るのは重要だが、その後自ら積極的に（企業インターンシップ参加など）行動を起こす段階にまでは必ずしも結びつかないのが現状であるため、今後は演習やワークショップ形式を組み合わせることを検討したい。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
1. あったかサポート講演会の案内チラシ（フライヤー）	
2. 当日の配布資料およびレジュメ 1（あったかサポート、小松氏）	
3. 当日の配布資料およびレジュメ 2（あったかサポート、笹尾氏）	
4. 当日の追加資料（労働条件通知書の例）	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

昨今、社会問題化しているブラックバイトをテーマとした講演会を設け、学生にとって身近なアルバイトを切り口としながら、自らのアルバイト経験や職業観を再考し、就職への意識を高めようとする取り組みは評価できる。[点検・評価]の記載にもあるが、講演を通じて知識を獲得するだけでなく、社会学の専門的な学びやインターンシップ参加など、より専門的・実践的な活動へと発展していくよう、さらなる教育的な働きかけを今後期待する。

<自己評定> S	<委員会評定> S
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
社会に貢献できる生き方を実践する力をつけるためのアクティブ・ラーニングの実験的实施	
[達成基準]	
アクティブ・ラーニングのプログラムに向けた開拓的授業を各学年で実験的に実施し、適宜報告書としてまとめる。	
[行動計画]	
2 年生の「フィールドワーク」における調査演習、3 年生の社会福祉実習に向けた現場職員との事前ワークショップ並びに実習など各学年において開拓的プログラムを実施。同時に、ボランティア活動への積極的参加、学生による地域の社会福祉施設へのヒアリング調査などを実施することで、社会への貢献や社会参加などの実践力を身につけるためのプログラムについて検討する。なお、実施した内容についての成果は報告書としてまとめる。	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>現代社会学・文化人類学コースにおける社会学・文化人類学演習を中心に次の実践を行った。①祇園祭における使い捨てごみを回収可能な容器に切り替えごみの減量、すなわち環境への負担を軽減する取り組みに参加した（250 名）（根拠資料 1）。②フィールドワークの授業では、学生がみずから班ごとに設定した調査テーマに沿って、前期は準備学習や調査計画の立案など、後期は学内外でのアンケート調査や聞き取り調査を実施し、成果報告書の作成およびパワーポイントでの調査結果プレゼンテーションをおこなった（28 名）（根拠資料 2）。</p> <p>社会福祉学コースでは、③舞鶴市内の各分野の社会福祉施設・事業所へのフィールドワークを実施。事前学習と事後学習により地域の自治体と福祉事業所との関連を学ぶプログラムを実施した（参加者 5 名）（根拠資料 3）。また、④毎週木曜日の深夜にホームレス支援の夜回りへの参加（4 名）及び⑤生活保護の裁判の傍聴等（5 名）による生活困窮者への社会的活動を学ぶプログラムを実施した。⑥滋賀県愛荘町における生活実態調査への調査員としての参加による社会調査を進めるプログラムの実施（25 名）。⑦京都市北区の中川学区でのフィールドワークへの参加（20 名）など実施し学生の参加を進めた（根拠資料 4）。また、⑧地域で活躍する女性に焦点を当てた公開講座を実施し、プログラム内容から運営にいたるまで学生を中心に進めるプログラムを実施した（7 名）（根拠資料 5）。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
多くの学生が講義・演習という機会を通じて、実践的で具体的な活動に参加している。各地域や団体からの期待も高まり、社会的認知度も上がってきている。	
[改善すべき事項]	
教員の体制が十分とはいえない。また、外に出ていくプログラムは時間的拘束が長いだけでなく、交通費など学生に負担が大きい。講義時間や移動手段などについて改善が必要。	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1. 祇園祭ごみゼロ大作戦ボランティア募集要項（大谷大学版）
2. フィールドワーク報告集（未）
3. スタディツアーin 舞鶴参加募集チラシ、北部福祉フィールドワーク事業実施計画書
4. 中川学区プロジェクト参加教職員・学生名簿
5. 「トークセッション：私にも地域にもハッピーな生き方・働き方」チラシ

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

社会学科の看板となる諸活動で、学生に幅広く実践の場が提供されていることが窺える。また、各活動の成果は社会的にも認知度の高いものとなりつつある。ただし、これらは教員の裁量に拠るところが大きく、学外組織や団体との連携をはじめ、教員の負担が相当に大きいと思われる。また、学生側の負担も指摘されている。今後さらにアクティブ・ラーニングの要請が高まり、社会学科の花形的な活動とも期待されることから、当該授業の効果検証、ならびに、教員・学生にとって有益な体制づくりの模索・検討を引き続き行っていただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015年度の目標等】	
[目標] 演習Ⅰ及び演習Ⅱについて	
<p>引き続き演習Ⅰでは、日本史・東洋史を専門に学んでいくための基礎知識の修得をめざすと共に、各々分野に関する歴史的内容を的確にまとめ、自分の言葉で表現する文章能力を向上させる。</p> <p>また、これを踏まえて演習Ⅱでは、学生が主体的に選択した自己のコースにおいて、専門的な知識を修得していくと共に、参考文献等の専門書や論文の精読と内容把握、及び資史料の収集・整理・分析を通じて、自分なりの歴史像を構築していくための基礎的な作法や手段を身につける。</p>	
[達成基準]	
<p>演習Ⅰでは、日本史・東洋史に関する基礎的な知識を修得し、その知識に基づきながら歴史的な事柄について、自分の言葉を適切に用い文意の明確な文章によってまとめることができるようになる。</p> <p>演習Ⅱでは、各コースにおける専門的な知識を修得する共に、専門書や論文の内容把握、資史料の考察の結果を的確にレジюмеにまとめて発表することができるようになる。併せて、レジюмеにまとめた内容を、専門的な知識に基づきながら、的確な言葉を用いてレポートに表現できるようになる。</p>	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰでは、授業の内容に沿って定期的に振り返りのレポートを課して担当教員が添削する。</p> <p>演習Ⅱでは、学生が作成するレジюмеについてコメントを付す。また振り返りレポートを課し、定期試験（レポート）についても添削を行う。</p>	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
<p>演習Ⅰでは、日本史・東洋史（半年ずつ担当）とも担当教員が作成したプリントを使用して基礎知識の修得をはかった。受講生はプリントの課題内容を予習して授業に臨んでおり、知識の修得という点では目標をかなり達成できたと考える。振り返りレポートについては、ほぼ毎回実施したクラス、半年間に数回実施したクラス、あまり実施できなかったクラス、などクラスにより実施状況に差があった。ただ、いずれのクラスでも時間的な制約が大きく、個別にレポートの添削指導をするには至っていない。</p>	
<p>演習Ⅱでは、すべてのゼミにおいて専門分野のなかから受講生各自がテーマを選び、あらかじめレジюмеを作成して授業時に発表している。発表前に個別にレジюмеの原案を提出させて事前指導をしているゼミがあるほか、事前提出を義務化していないゼミでも、受講生が自発的に原案を持参して指導教員の指導を仰ぐ場合が多い。また、どのゼミでも発表時にレジюмеに対してコメントを付与しており、この点では目標を達成できていると考える。振り返りレポートについては、いくつかのゼミで中間レポートを提出させている。期末のレポートに対しては、ほぼすべてのゼミで添削をし、返却している。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>演習Ⅰでは、日本史・東洋史の基礎知識の修得という点では、効果が上がっている。受講生のなかからは、「高校では日本史（または世界史）をきちんと履修できなかったのが、ここで勉強できてよかった」という感想も出ていた。演習Ⅱでは、レジюмеの作成と発表について、年間を通じて数回繰り返</p>	

返すことで、受講生のほぼ全員が修得するに至っていて、この点も効果が上がっていると考え。

[改善すべき事項]

演習Ⅰでは、振り返りレポートを、限られた時間をいかに有効に活用して実施するか、また実施したレポートをどのようにして「次」に活かしていくか（たとえ添削して返却したとしても、受講生が添削内容を咀嚼しなければ、活かされたとは言えない）、が課題である。また演習Ⅱでは、レジュメに対するコメントの付与、レポートの添削などは実施されているが、演習Ⅰと同様、それをいかにして「次」に活かし、受講生の力量を高めていくかが課題となる。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

①-1 「日本の歴史（概観）」（演習Ⅰ日本史プリント）

①-2 演習Ⅰ東洋史プリント

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

演習Ⅰでは教員の自作プリントの活用により基礎的な知識の習得が図れたことにより達成基準は満たしているが、獲得した知識を基に振り返りレポートを作成することについてはクラスによって偏りが見られる。演習Ⅱでは学生各自のテーマに基づくレジュメの作成と発表ができたことは達成基準を満たしている。演習Ⅰ・演習Ⅱどちらもレジュメへのコメントや添削指導により適切なレポート作成ができていると考えられるが、学生がそれらの指導を確実に受け止め、次のレジュメやレポート作成に生かされるような指導の在り方をさらに工夫していくことが求められる。評価はAとした。

<自己評定> A	<委員会評定> B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
<p>卒業論文執筆に向けての個別指導の推進。 「ゼミ」を大学での学びの要（かなめ）と位置づけ、発表や討議、レポート執筆を通じて、学生一人一人が、史・資料を読み解き課題に取り組む力や、自分の考えを表現する能力を身につける。</p>	
[達成基準]	
卒業論文提出率を 90 パーセント以上とする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう履修指導を徹底する。 オフィスアワーの活用のほか、全ゼミ生を対象とした個人面談による個々の学生に合わせた指導を行う。前期・後期それぞれ少なくとも 1 回の個人面談を実施する。 レジュメやレポート作成について個別指導を実施すると共に、レジュメへのコメントや、レポート添削などの事後指導を行う。 長期休暇中の課題を課すことにより、「ゼミ」への取組の関心を持続させる（2 年生 4,000 字、3 年生 6,000 字、4 年生 8,000 字程度のレポート）。また、2 年生、3 年生には学年末にも同様の課題を課す。 	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>卒業論文の提出率は 90 パーセントには届かなかったが、前年度に比べて 10 ポイントほど上昇し、卒業延期者も減る見通しである。講義・実践研究の履修指導は、各ゼミで行っているが、下に述べたように、徹底するには至っていない。個人面談は多くのゼミで実施されており、教員と学生との距離を縮め、一人一人の問題関心を掘り下げる上で効果を上げている。ただ、受講生数が非常に多いゼミでは、個人面談を行うのは時間的に無理な状況にある。レジュメやレポートについての、作成の指導、コメントの付与、添削指導などは、どのゼミでも実施している。また、長期休暇中のレポートについては、全体の約 8 割のゼミで課している。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>授業でのテーマ発表を軸としたレジュメ作成とコメント付与、レポートの添削指導などは、どのゼミでも実施しており、授業に出席する学生は、ほぼ全員が卒業論文の完成に至っている。そのなかには学術的にかなり水準の高いものもあり、学科編集の学術誌『大谷大学史学論究』には毎年数本の卒業論文抄録を掲載している。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>もっとも改善を要するのは、行動計画の 1 に掲げた、「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう履修指導を徹底する、という点である。履修指導は行っているが、学外の所用に妨げられて望ましい科目を選択できなかったり、授業の内容よりも単位の取りやすさを優先して科目を選択したりするケースが後を絶たず、「徹底する」には至っていない。</p>	
<p>また、レジュメやレポートの指導は、総体では効果を上げていると考えるが、何回も同じ点を指摘</p>	

しなければならない（つまり、前回の指導が身につけていない）学生もおり、このような学生に対してはどのような指導方法が有効か、工夫が必要である。

個人面談について、受講生が非常に多いため、実施が困難なゼミがある。ゼミの人数の適正化は、個々の教員を超えた学科全体、大学全体の課題である。

なお、卒業論文が提出できないなどの理由で卒業延期となっている者の大半は、心身の不調で大学に来ない（来られない）学生が占めている。他の学年でも、同様の理由でゼミの授業にほとんど出席していない学生がいる。これらの学生に対しては、学科の教員による通常の指導では対応が困難な場合が多く、学生支援課や保健室など関連部門との連携が必須である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

②-1 大谷大學史學論究第 21 号

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

卒業論文の執筆に向けての個別指導の推進がなされているが、改善すべき事項に挙げられているように、学科全体として履修指導の「徹底」に至っていない点が課題として残っている。限られた時間のなかで工夫して個人面談が実施されている点は評価できるが、ゼミの人数により十分になされているところとそうでないところのばらつきがあるため、学科全体としては十分とは言い難い。卒業論文につながるレポート作成において個別指導や事後指導は一定の成果を上げており、学生の関心・意欲を高め水準の高い論文作成につながっている点は評価できる。指導が届きにくい学生への指導の工夫、ゼミ人数の適正化を図ること、卒業延期者への指導の在り方等一層の取り組みが求められる。評価は B とした。

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015年度の目標等】	
[目標] 「読み書き」を重視する「演習Ⅰ～Ⅲ」	
これまで「演習Ⅰ」に設定してきた目標を「演習Ⅱ～Ⅲ」にも拡げる。文学研究における基本的な知識・方法を学び、文学科4コースそれぞれの文献（作品）読解と自らの見解の表現を試みる。	
[達成基準]	
1.講義を正確に理解し、その内容を適切にまとめることができる。 2.文献（作品）を正確に読みとり、その内容を適切に文章表現できる。	
[行動計画]	
授業方法	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 文献（作品）の読解および論述の方法に関する基礎知識の修得。 講義によって、上記の理解と記憶を促す。 2. 文学科4コースそれぞれの具体的な文献（作品）解釈の技能の涵養。 実際に学生が担当して調べ発表することによって、上記の力量を養う。 3. 1・2を踏まえて自らの見解を論述する経験を積む。 追加の調査・考察をも含めてレポートを書く。 	
授業計画	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 文学研究の意義を学ぶ。 2. 取りあげる文献（作品）の概要および解釈上の留意事項を把握する。 3. 対象文献（作品）を精読し、読解上の必須知識を得る。 4. 読解内容の要約、解釈上の見解・所感を、適切に論述する。 5. 作成した論述文の講評を踏まえ、読解の深化をはかる。 6. 文献（作品）の魅力を探り、参照・参考文献の必要性を理解する。 <p>1～6を振り返り、レポートを作成する。</p>	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
自己点検・評価委員会より、昨年度に設定した達成基準が学生の視点で設けられているとの指摘を受けた。これにより、今年度の基準そのものを教員からの観点へと変更する必要が生じ、既に設定された達成基準は満たせない状況にはなったが、行動計画は整っていたため、予定通り進められた。	
達成基準1は「講義を正確に理解させ、その内容を適切にまとめさせる」、2は「文献（作品）を正確に読みとらせ、その内容を適切に文章に表現させる」へそれぞれ読みかえることとし、達成へと進めた。	
演習Ⅰでは作品の読解と解説を行い（読解能力の養成）、年4回レポートを課した（記述能力の強化）。演習Ⅱ～Ⅲでも4コースでそれぞれ各分野または各時代に応じた文学作品を精読し（読解能力の強化）、学生に発表資料を作成させ（記述能力と表現能力の強化）、授業で考察と検討を行った。学生には、当然個人差はあるものの、おおむね講義を理解させ、文献の読解力と文章表現力を向上させることができた。	

3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
多くの学生が講義を理解した上で、その内容を適切にレポートにまとめられた。また、文献を読み、発表資料を作成して文章に表現できる学生が増えた。
[改善すべき事項]
レポートの提出率を上げる。
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること
①-1. 演習Ⅰ学生レポート（代表例：中国文学）およびレポート提出率一覧表
①-2. 演習Ⅱ学生レポート・発表資料（代表例：国文学・ドイツ文学）
①-3. 演習Ⅲ学生レポート・発表資料（代表例：英文学）

<自己点検・評価委員会使用欄>
<所見>
目標達成に向け行動計画に基づいて、取り組んでいることが確認できる。達成状況については、根拠資料にあげた内容から、堅実なレポート・発表資料が生み出されていることを確かめることができる。改善すべき事項に留意しつつ、更に継続、改善できるよう取り組むことを期待する。

<自己評定> B	<委員会評定> B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
「中国語」教職課程認定申請をめざす。	
[達成基準]	
<ol style="list-style-type: none"> 『教職課程認定申請の手引』を参照に申請書類を検証する。 申請書素案の作成 	
[行動計画]	
<p>「中国語」教職課程認定申請に向けて、実際の書類と手順などを調査する。</p> <p>関係部署と協議の上、申請書類の素案を作成する。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>一学科一教免の方向性により、現在文学科で取得できる国語と英語の教免（中学・高校）に、さらに中国語（高校）の免許を加えることは困難であることが明らかになった。また、昨年度作成した「文学科高等学校教諭一種免許状 中国語(案)」に記載した中国語および中国文学にかかわる授業を確保することが難しいことも判明した。</p> <p>『教職課程認定申請の手引』を参照し、大学全体としては申請に必要な教員数は満たしているものの、関係部署とも相談した結果、達成するには文学科に中国語教授法を専門とする専任教員を 1 名入れる必要があることも分かった。</p> <p>計画に沿って行動したが、結果的に認定申請を断念せざるをえず、目標を達成できないことが判明した。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
基準 1 は達成された。その結果、諸事情が判明した。	
[改善すべき事項]	
<p>基準 2 は達成されなかった。達成するためには、</p> <ol style="list-style-type: none"> 授業数確保 専任教員の所属移動又は新規採用 <p>が改善すべき事項に挙げられる。</p>	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
⑤文学科高等学校教諭一種免許状 中国語(案)	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

目標、行動計画に基づき、取り組んだことが確認できる。申請に必要な内容が判明した結果、「認定申請を断念せざるをえない」という残念な形となったが、取り組んだ結果としての判断であることは確かめることができた。

<自己評定> A	<委員会評定>A
1. 【2015年度の目標等】	
[目標]	
1・2年生の長期欠席者及び問題を抱えた学生への対応の検討と、持続的ケアの実施	
[達成基準]	
行動計画がすべて実行できたことをもって、達成と判断。	
[行動計画]	
<p>① 1年生：授業担当者及び担任が緊密に連絡を取り、長期欠席に至ると思われる学生、あるいは精神的・経済的問題を有する学生がいないか、気をつける。その目的のため2014年度より実施している1年生と担任との面談を今年度も行なう。また、前後期1回ずつのクラス別懇談会や学生支援課主催の「新入生クラス別茶話会」も同じ目的意識のもとに取り組む。</p> <p>② 上記の如き学生が見出された時は、速やかに聞き取りなどを通し適切な対処を行う。</p> <p>③ 2年生：1年生の時の記録をもとに、授業担当者及び担任が見守りとケアを行う。演習Ⅱは各コースに分かれるので3年生進級への橋渡しも兼ねて各コースでも情報を共有する。</p> <p>④ 前後期1回ずつ学生支援課より依頼をうける長期欠席者調査に積極的な情報提供を行うと同時に、この情報を有効利用する。閲覧可能なこの調査表を、学科会議や小委員会場で活用するとともに、適宜補足・改訂を行ない、今後の参考とする。</p>	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
<p>今年度も1年生の担任は前期に面談を行い、学生の状況把握に努めた（根拠資料⑥-1）。また、1年生担任の4名は緊密に連絡を取り合い、1年生アンケート・合同ガイダンス・合同懇談会を計画し、情報の収集と共有を行った（根拠資料⑥-2・3）。さらに学生支援課の長欠調査には、問題を有する学生の早期対処を期し、3回連続欠席でなくとも記入することとした。後期には前期無単位の学生の情報を共有し、出来る限り連絡をとるように努めた（根拠資料⑥-4）。これらにより行動計画①②は実行されたと考える。</p> <p>2年生以上の長欠調査の結果は、サイボウズや学科会議を通して通知し、教員の連携をはかり、指導教員と各コースの代表者（小委員）・主任の三者で情報を交換した（根拠資料⑥-5）。学生に連絡する体制を整え、どのコースの教員でも問題を有する学生の見守りとケアを行える状態の実現に努めた。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
連絡を受け、授業に出席する学生が増えた。また、ミスマッチ入学の学生に早期対応ができた。	
[改善すべき事項]	
面談率をあげる。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
⑥-1. 1年生面談率一覧表	
⑥-2. 1年生担任・副担任間の意見交換（サイボウズでの連絡）	
⑥-3. 要配慮学生（1年生）の情報共有（サイボウズでの連絡）	
⑥-4. 1年生担任の情報共有（サイボウズでの連絡）	

⑥-5. 全学年長欠学生情報の共有（サイボウズでの連絡）

*個人情報につき取り扱いにご注意ください。

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

目標と行動計画にもとづいて、取り組んでいることが確認できる。特に根拠資料の内容から、サポートが必要な学生を把握し、教員同士が情報を共有しつつ、学科として学生をサポートしていることと判断できる。改善すべき事項にあげられている課題への対処も含め、引き続き積極的に取り組んでいくことを期待する。

<自己評定> A	<委員会評定>A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標] 「文藝塾」構想の具体化	
2014 年度に 2015 年度開設予定「文藝塾」に係る教育内容を文学科が主体となり計画実施する決定が下された。「文藝塾」運営に係る具体的な方策を定め実施してゆく。	
[達成基準]	
行動計画の実現	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 規程に基づく「文藝塾」方策の検討と確立 ・ 2015 年度開講「文藝塾講義」の実施 ・ 2015 年度実施「個別面談」の方法確立と実施 ・ 2016 年度開講予定「文藝塾演習」の計画 	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>平成 27 (2015) 年 4 月「文藝塾規程」が制定された。(根拠資料⑦-1)</p> <p>(文藝塾の意義に関しては「文藝塾講義」第一講ガイダンスにおける解説参照。(根拠資料⑦-2))</p> <p>業務内容は、(1)文藝実践の相談に関する事項、(2)文藝実践の授業に関する事項、(3)文藝実践の課外講座に関する事項、(4)その他文藝実践に関する事項、である(規程第 3 条)。</p> <p>文藝塾の場所は、響流館 3 階に置かれ、当面はコミュ・ラボ(社会学科)と共同して利用することとなった(根拠資料⑦-3)。なお、施設管理は、教育研究支援課及び総務課の所管である。</p> <p>文藝塾事務所管は、学生支援部教務課及び企画入試部企画課(規程第 8 条)であり、第 3 条(1)(2)は教務課、(3)は企画課が事務主体となって実施された。</p> <p>文藝塾の運営に関しては規程第 5 条に基づき、塾長、副長を含めた運営会議を置き(根拠資料⑦-4)、また授業を中心とした具体的方策を検討するための委員を、主に文学科専任教員から選任して、正課授業会議も設けた(根拠資料⑦-5)。</p> <p>2015 年度は、授業(教務課所管)として「文藝塾講義」を、課外講座(企画課所管)として「文藝塾セミナー」を、それぞれ実施した。(根拠資料⑦-6、⑦-7) また、毎週 1 時限分、文藝塾オフィスアワーを設定し、講義担当者が待機して、「文藝実践の相談」に対応することとした。</p> <p>その他、「文藝塾演習」の計画を始め、「文藝塾」方策の検討については、主として文藝塾正課授業会議において議題にされ、内容は議事録にまとめられている。(根拠資料⑦-5)</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
文藝塾の組織と運営に関する基盤が整備され、初年度計画がすべて実行された。	
[改善すべき事項]	
<p>「文藝塾講義」の具体的内容(とくに招聘講師)を早期に定めるための方策が必要である。</p> <p>次年度開講「文藝塾演習」の実施については、継続的な検討が必要である。</p>	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- ⑦-1. 規程
- ⑦-2. 「文藝塾ガイダンス（意義目的方針）」、付別添（テキスト批評）
- ⑦-3. 「文藝塾」「コミュ・ラボ」スペースの利用・運用
- ⑦-4. 文藝塾運営会議議事録
- ⑦-5. 文藝塾授業打ち合わせ議事録
- ⑦-6. 文藝塾講義チラシ
- ⑦-7. 文藝塾セミナーチラシ

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

目標の下、行動計画の内容に基づいて、「文藝塾」構想の具体化という新たな取り組みを着実に進めていることを確認することができる。改善すべき内容を踏まえ、更に充実した内容になるように取り組むことが期待される。

<自己評定>B	<委員会評定>B
1. 【2015年度の目標等】	
[目標] 演習について	
<p>日本国内においても社会は文化的に多様化し、国際化が急速に進行しつつある。「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」の授業を通じて、このような現代社会を生き抜く力を養い、広い視野を獲得する。社会に氾濫するさまざまな情報や提示された資料を偏見のない目で読み解き、自分の言葉でまとめたものをわかりやすく伝える能力の育成をおこなう。「演習Ⅰ」ではより基本的な文化の概念や文化を学ぶ技術を獲得させ、「演習Ⅱ」ではそれらの学びや技術を具体的なゼミ地域分野に応用する。</p>	
[達成基準]	
<p>「読み」「書き」の「読み」の部分においては、基本的な知識の涵養と事象を的確に把握する力の育成を強化することで、多角的な読解力と理解力を獲得する。「書き」の部分においては、第三者への伝達に必要な客観性をもたせる。また、情報を発信するだけにとどまらず、他者との討論などを通して自らの考えを深めていけるようにする。</p>	
[行動計画]	
<p>「演習Ⅰ」は学生の「読み」「書き」能力のさらなる育成のために、文章のやりとりだけにとどまらず、視聴覚資料を適切に利用する。とりわけ視聴覚資料を読み取る、そして書き出すこと、さらには相互に批評しあい、自分の作成した文章や発言に客観性をもたせるようにする。「演習Ⅱ」は各ゼミ地域分野に即した資料収集力を養成し、それらを読み込ませる。その上で資料を分析させ、発表を経てレポートをまとめさせる。</p>	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
<p>演習Ⅰでは、教室での講義、新聞記事、ドキュメンタリーやコマーシャルなどの視聴覚資料などをもとに、学生が各々その内容をレジュメにまとめて口頭で発表を行った。あるいは、ワークシートを用いたグループワークによる発表を行った。パワーポイントの使い方や関連文献の検索についても学習した。また、発表の問題設定や改善点を書かせるコメントシートを活用し、発表を聞いての相互批評も実施した。演習Ⅱでは、問い・仮説・検証という論文の定型を教え、提出されたミニレポートを添削して返却することで定型を覚えて使えるよう練習した。個人のテーマに基づく発表と統一テーマについての発表を行い、互いにコメントする相互批評や相互添削も実施した。また、映画の翻訳練習を通して文化の学習とともに語学力を養った。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>相互批評やコメントシートを用いることで、学生が自分の発表の客観性を検証しつつ、レジュメの作り方、発表の仕方、発表の聞き方やコメントの仕方を練習することで、その基本を学生が身につけることができた。視聴覚資料を用いた学習は効果的であり、学生の関心も高く取り組みも積極的になることが分かった。語学への関心が増し、検定試験に挑戦する学生が現れた。</p>	

[改善すべき事項]

演習Ⅰについては、レジュメにまとめたり発表したりする能力に個人差があるため、早くから能力を見極めて丁寧に指導することが課題となる。同時に、そうした学習についてこられず脱落する学生が増えているため、どのように指導・対応すべきかという点も課題である。演習Ⅱではパワーポイントによる発表が多かったため、もっと文章を書かせるべきであった。また、論文の定型はある程度覚えることができたが、定型から独自の発想を広げるにはどう指導すべきかが今後の課題である。

4.【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- ①-1 国際文化演習 1-1a 使用プリント
- ①-2 授業使用プリント（日本と中国の歴史について）
- ①-3 演習Ⅱ（学生のコメント）
- ①-4 演習Ⅱ（学生レポート）

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

演習Ⅰ、Ⅱにおける取り組みについて、個別的な内容は理解できるが、達成基準が曖昧であると言わざるを得ないために、点検・評価することは難しい。取り組んでいる内容は重要なものがあるだけに、実際の行動を円滑に進めるためにも、目標と達成基準、行動計画の立て方を整理検討する必要がある。評価は、取り組みの内容や根拠資料から、学科の評価と同様、Bとした。

<自己評定>B	<委員会評定>B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
<p>国際文化学科では 2014 年度には「食文化」「茶文化」「環境」といったテーマのもとに、さまざまなイベントを開催してきた。今後はこうした各種行事を単発のものとして終わらせず、たがいにリンクさせ、各文化を有機的に理解してもらう。所属教員が学外で各文化を紹介する活動に参加することが多いが、そうした学外での活動を学科にフィードバックしていき、学科が社会に貢献している実態についても大学ホームページや「学科オリジナルサイト」などを通じて、伝えていく。</p>	
[達成基準]	
<p>各種行事をする際に、担当教員のみならず学科全体で計画をたてていき、1 年を通じて体系的な行事展開をしていけるようにする。行事終了後はかならずアンケートをとり、来場者の反応を分析する。学科オリジナルサイトへのアクセス数が 1 日平均 100 名を超えるようにする。</p>	
[行動計画]	
<p>各種行事について、学科が一丸となつてのぞむ。これまで学内で実施してきた行事のみならず、学外の行事とも連携をもたせながら、その結果を学科にフィードバックさせる。</p> <p>これまで、卒業生との懇談会や留学・海外研修の報告などを行ってきたが、今後は国際文化の学びが社会に出ていくにあたってどのように役に立ったのかについて、卒業生を中心に調査をしていく。学科オリジナルサイトの有効活用のために、サイトの構成や運営について再考する。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>オリジナルサイトへのアクセス数に関しては、特に授業のない期間において目標を下回ってしまった。図書館と共催した「星の王子さま」の朗読会終了後観客からアンケートを提出してもらった。国際文化学科のゼミで学園祭に参加した様子や、学科主催イベント「おいし～異文化カフェ」の報告、卒論中間発表会の模様などを学科オリジナルサイトのブログで逐一報告し、学科としての活動の模様を発信することができた。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>前年度よりもオリジナルサイトの記事投稿者や投稿内容が多様化し、国際文化学科の持つ多様性・オムニバス性を反映した更新内容になっている。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>オリジナルサイトの閲覧数が伸び悩んでいるため、更新の内容や頻度についてさらなる工夫が必要。高校生に訴求する内容としては卒業生の進路報告が考えられる。在学中の語学や国際交流関係の学びを活かしてアパレル関係の仕入担当になった卒業生や、留学の夢をかなえた卒業生がいるが、今後、彼らに体験記などを投稿してもらえるよう働きかけていく必要がある。</p>	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
<p>②-1 朗読会アンケート ②-2 学科オリジナルサイト</p>	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

学科の様々なイベントやオリジナルサイトの充実に力を注いで取り組んでいることは確認できる。特に、オリジナルサイトについては、その内容が多様化されていることは根拠資料から確かめることができた。改善すべき事項にも明記されている通り、学科の取り組みが、高校生や学外の人に訴求できるよう、さらに充実した取り組みを期待する。

<自己評定>B	<委員会評定>B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
<p>2015 年度は文化環境コースが発足して 3 年目にあたる。コース所属の学生は第 2 学年と第 3 学年の 2 学年にわたるので、コース所属学生の縦のつながりを促すようなゼミ運営を実施する。また、学科講義科目「環境文明論 1」と実践研究科目「野外調査演習 2」では、前回とは異なった視点で授業を展開し、多様な学びの機会を提供する。これらの新たな授業実践を通して、文化環境コースを学生募集力のあるコースとして発展させる。</p>	
[達成基準]	
<p>授業内容の改訂と現地調査を軸としたゼミ運営を通じて文化環境学の魅力を伝え、来年度の新第 2 学年の文化環境コース希望学生を 10 名以上確保する。</p>	
[行動計画]	
<p>初めての文化環境コース第 3 学年を迎え、自然環境と文化・文明の関わりの調査手法を具体的に教授するために、京都市外の調査地を選び、ゼミの現地調査合宿を実施する。その成果発表を第 2 学年のゼミと合同で行い、コース学生の縦のつながりを促す。これらの成果について学科ホームページに記載し、学科在学生ならびに受験生に対しわかりやすく伝える。講義科目「環境文明論 1」では、植物と文化の関係に詳しい講師を新たに迎え、これまでと違った視点での授業を実施する。実践研究科目「野外調査演習 2」では、三宅伸一郎准教授が街中に見られる文化事象の現地調査を指導し、昨年とは違う観点から実践的授業を展開する。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>「環境文明論 1」では、新たに森の宗教的意味を軸にこれまでにない視点での授業を展開した。「野外調査演習 2」では街中に見られる異文化事象についての現地調査を行った。第 3 学年のゼミでは、久美浜町（前期）、淡路島（後期）の現地調査を実施し、現場での主体的学びを実感できるようにした。2015 年度の第 2 学年は真宗学科からの転入の学生と留年生を含めて、6 名となった。また第 3 学年は 1 名減り、10 名である。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>第 3 学年の現地調査では、学生自ら課題を設定して現地でデータ収集することで、主体的な課題解決能力の向上をはかった。第 2 学年では転入学科の学生が増え 6 名に達したものの、目標の 10 名には至らなかった。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>第 2 学年でのコース生確保が課題である。学科オリジナルのウェブサイトでは、演習や卒論の成果を公開し、文化環境学の魅力を発信している。ウェブサイトをもさらに充実させるとともに、第 1 学年の授業での魅力の発信にも向けて努力したい。</p>	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

③-1 環境文明論レポート

③-2 第3学年文化環境ゼミ淡路島調査発表資料

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

目標、行動計画のもと、着実に取り組んでいることが確認できる。根拠資料の内容から、ゼミの学習も調査発表など学生にとって主体的な学びとなっていることを確かめることができた。ただし、コースの人数10名という達成基準については2015年度の2年生では達成できておらず、課題が残る。コースの魅力が、多くの学生達に伝わるように更なる努力を期待したい。

<自己評定>A	<委員会評定>A
1. 【2015年度の目標等】	
[目標]	
<p>演習Ⅰと演習Ⅱの連続性について</p> <p>1. 演習Ⅰにおいては、情報の収集・必要な情報の取捨選択・情報の再構築 前期：他者の話（講義）を聞いて、その内容をノートに取り、レポートで再現できるようにする 後期：文献を読み、その内容をまとめる力を養成する を目標とする。</p> <p>2. 演習Ⅱにおいては、演習Ⅰの内容をふまえ、他人の調査した結果を自らのものと組み合わせ、他者の前で発表し、また他者の発表内容を短文でまとめる力を養成する。</p>	
[達成基準]	
<p>1. (1)から(4)が演習Ⅰ前期、(5)から(7)が演習Ⅰ後期、(8)以降が演習Ⅱの内容である。</p> <p>(1) iPadの導入とその意味が理解できる。</p> <p>(2) 他者の話（講義）を聞いて、その内容を5W1Hの要素を含むメモを取る必要性が理解できるようになる。</p> <p>(3) メモをもとに、用語の意味を「自分がわかるもの」「辞書をひいてわかるもの」「辞書に記載のなかったもの」に分類する。「辞書をひいてわかるもの」や「辞書に記載のなかったもの」に対し、iPadを利用して自分で調査ができるようになる。</p> <p>(4) メモを取った内容について、レポートで再現できるようになる。</p> <p>(5) 各自で研究テーマを考えた後、関連文献が検索できるようになる。</p> <p>(6) 文献を読むことができ、さらに、その内容を要約することができるようになる。</p> <p>(7) 調査結果を基にして、レポートの形式に再構築できるようになる。</p> <p>(8) 他者のメモと自分のメモから、発表のための構想を企画できるようになる。</p> <p>(9) プレゼンテーションツールを利用して発表できるようになる。</p> <p>(10) 他者の発表を短いメモにまとめることができるようになる。</p>	
[行動計画]	
<p>(1)から(4)が演習Ⅰ前期、(5)から(7)が演習Ⅰ後期、(8)以降が演習Ⅱの内容である。</p> <p>(1) iPadの導入とその意味を理解させる。</p> <p>(2) iPadにメモアプリをインストールさせて、メモを取らせる。</p> <p>(3) iPadに辞書アプリをインストールさせて、毎回アクセスするように指導する。また、iPadで作成したメモの用語について、理解できないものについては自分で検索させる。</p> <p>(4) レポートにまとめる。</p> <p>(5) 自分で研究テーマを考え、それに関連する文献を検索させる。</p> <p>(6) 人文情報学に関連する論文を要約させる。</p> <p>(7) 自分で行った研究の内容をレポートとして出力させる。</p> <p>(8) 発表用の企画書を作成する。</p> <p>(9) プレゼンテーションツールを利用して発表の下準備を行い、それを利用して発表する。</p>	

(10) 他者の発表を短いメモにまとめる。
2. 【2015 年度の達成状況報告】
(1)から(10)までのすべてを 100%実施した。
3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
本講義を単位取得できた学生は、レポートを所定の形式に従って構築することがおおむねできると判断可能である。
[改善すべき事項]
メモの取り方の教授に、さらなる工夫の余地がある。
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

<自己点検・評価委員会使用欄>
<所見>
演習Ⅰで iPad を利用してレポートを作成する基礎的なスキルを身につけた上で、演習Ⅱにおいて他者への発表へと進むという形で、演習Ⅰと演習Ⅱの連続性を意識したカリキュラム構成がなされている。今後も継続し、さらなる成果の検証をしていただきたい。

<自己評定>B	<委員会評定>B
1. 【2015年度の目標等】	
[目標]	
保証人への丁寧な情報伝達を行う。 単位不足、あるいは成績不振の学生へは、年度末に保証人に連絡し、情報共有率を90%以上にする。	
[達成基準]	
(1) 入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明する。	
(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に保証人に対する連絡を行う。卒業年次の留年学生には、演習Ⅳ（ゼミ）担当教員から保証人への電話連絡率を90%以上にする。それ以外の留年学生には本人と各演習担当教員との面談を基本とし、本人に連絡がつかない等特別の配慮を必要とする場合の保証人への電話連絡率を90%以上にする。	
(3) 成績表の説明書については、保証人が学生を指導しやすいように見直す。	
(1)・(2)・(3)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。	
[行動計画]	
(1) 入学式・オリエンテーションにおいて、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法などを説明し、学科教員を紹介する。	
(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生に対して、年度末に演習（ゼミ）担当教員が保証人に電話連絡を行い、必要に応じて各課と連携を取りつつ面談を行う。 ○学科会議およびサイボウズにおいて、各演習（ゼミ）での成績不振の学生に対する情報交換を行い、面談の必要性等の状況を確認する。 ○学生の諸情報について、関連する各課と情報交換を行い、連携を強化する。	
(3) 成績表の説明書を修正する。	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
(1)入学式後に、学科主任から説明を行った。その後入学式に参列した教員を紹介した。	
(2)留年生への連絡は継続的に行っており、2016年度にまたがる形で引き続き行っている段階である。 ○学科会議およびサイボウズでの情報共有は活発に行い、すべての教員が学科学生の同行をおおむね把握できる体制が確立できた。 ○関連各課との情報交換及び連携を積極的に依頼した。	
(3)成績表の説明書の修正はできなかった。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
面談や電話連絡においては、大学に対する信頼感を回復させることができ、今後の学生指導に対し教員のみならず大学全体で協力する体制を構築することができた。	
[改善すべき事項]	
学生の状態によっては、保証人との直接連絡を避けたほうが効果的であることがわかった。また、保証人が面談を望まないケースも多かったが、それは必ずしも学科からの働きかけに非協力的である	

ことを意味しない。実状にあわせ、今後の達成目標とその値の母数を変更すべきと思われる。
成績説明書のブラッシュアップは、次年度以降に継続作業とする。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

面談や電話連絡によって保証人への丁寧な情報伝達を行うことや、学内での情報共有を進め連携を強化することは、学生指導に良い効果を生んでいると考えられる。成績表の説明書の修正は行われていないが、保証人が学生を指導しやすい形に変えることは有効であると思われるので、引き続き取り組んでいただきたい。

<自己評定>A	<委員会評定>A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
<p>学生の学習意欲を喚起する。</p> <p>学科に関連の深い資格試験に合格させたり、学科で必須のタイピング技能を向上させたりすることで、勉強全体に対しても「やればできる」という積極的な姿勢を身につけさせる。</p> <p>科目によっては、その授業内容を「学び紹介」として公開し第三者からの評価を受けることで、授業に対するモチベーションを高める。</p> <p>全学科生を対象とした授業の満足度・学習意欲の充実度についてのアンケートを予定し、全学生に対する回答率を 50%以上とする。</p> <p>卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。</p>	
[達成基準]	
<ol style="list-style-type: none"> (1) 学科に関連の深い資格試験を紹介し、興味のある学生に対しては受験対策を考える。 (2) タイピング・コンテストを実施し、コンテストに向けて練習させる。 (3) デジタル・ライブラリーコースが行ってきた見学会と図書館周辺活動を、学科学生全体を対象として引き続き実施する。 (4) 授業内容について、できるだけ「学び紹介」としてホームページその他に公開する。 (5) 全学科生を対象としたアンケートについては、項目を完成させ実施する。 (6) 卒業式において、学科内での成績優秀者を表彰する。 <p>(1)から(6)のすべてが実施できた時に、達成できたと判断する。</p>	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> (1) 学科に関連の深い資格試験について、1 号館 4 階人文情報学科サポート室前掲示板にポスターを貼り紹介することで情報を公開する。さらに、興味のある学生に対しては演習（ゼミ・クラス）で受験対策を考える。 (2) タイピング技能の向上を図り、学習へのモチベーションを持たせる。演習（ゼミ・クラス）で技能の向上を図るよう促し、コンテスト情報を告知する。また、コンテストへの参加とともに、スタッフとしての参加も募り、コンテストの周知徹底を図る。 (3) 授業内容について、オープンキャンパスなどを通じて「学び紹介」として公開する。 (4) 全学科生を対象としたアンケートを作成し、実施する。 (5) 3 月の学科会議で「成績優秀者」を決定する。 	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<ol style="list-style-type: none"> (1)1 号館 4 階サポート室前に、掲示板を増設し 2 枚体制でポスターや各案内掲示を行った。また、学年度開始時のガイダンスにおいて、各ゼミの特性にあった資格試験を示した資料を配布し、受験対策を行った。結果は、掲示板にて合格者氏名等を掲示した。なお、氏名掲示にあたっては学生の意向を尊重した。 (2)2016 年 3 月下旬に Welcome Back to Campus Week という学科独自イベントを開催し、その最終日にタイピング・コンテストを開始した。スタッフは実行委員長をつとめる教員のゼミ生が中心とな 	

り、前年度担当の学生のノウハウを継承しつつ企画運営を担当し、学科全体としての PDCA サイクルが確立しつつ有る。

(3)前期・後期を通して、DL コース見学会を学科学生を対象として公開募集した。

(4)オープンキャンパスにおいて、人文情報学演習 II の前期プレゼンテーション大会を公開するなど、積極的に学びを紹介した。

(5)全学科生を対象としたアンケートを作成し、Web 経由で実施した。

(6)卒業式において「ベスト卒論賞」「準ベスト卒論賞」を発表し表彰した。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

達成基準のすべての項目を実施した。

[改善すべき事項]

各イベントの参加者をさらに増やすための工夫が必要である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

学生の学習意欲を喚起するために、さまざまな取り組みが行われており、それぞれ効果をあげていると思われる。全学科生を対象としたアンケートの結果の分析などによって、今後こうした取り組みがさらに一層学生の意欲喚起につながることを期待する。

<自己評定>A	<委員会評定>A
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標]	
旧 4 コース制から新 2 コース制（「情報マネジメントコース」と「メディア表現コース」）への移行を学外に周知する。	
[達成基準]	
<ul style="list-style-type: none"> ・周知対象を 3 種類に分類し、対象毎の実施率で判断する。 ・なお、上記基準設定に関わらず、新入生定員（100 名）充足をもって 100%の達成とする。 	
[行動計画]	
<p>(1) 行動計画概要</p> <p>(ア) 対象を高校生・高校の進路指導教員・他大学教職員の三種類に分類し、それぞれの層に対し、人文情報学科の新コース移行の妥当性と新規性の理解を促す。</p> <p>(イ) 具体的な行動は、高校生が進路を決める 9 月末迄の半年間に集中させる。</p> <p>(2) 高校生を対象に、イベントや動画配信を行う。イベントについては、入学センター主催「オープンキャンパス」との連動を想定するが、連動が難しい場合、学科単独で行う。</p> <p>(ア) 新コース移行の妥当性と意義が具体的に理解できるよう、教員と学生の対談を公開する。</p> <p>(イ) オープンキャンパス開催日に、在学生の学習成果の発表の場を設け、高校生に公開する。</p> <p>(ウ) 過去の講義成果物の動画を、YouTube で配信する。</p> <p>(3) 高校の進路指導教員を対象に、学科独自の教育教材及び講義成果物を持参しての教員による高校訪問を行い、新コース体制移行の妥当性と将来性を理解して頂く。</p> <p>(4) 大学教職員を対象に、公益社団法人 私立大学情報教育協会主催の「教育改革 ICT 戦略会議」(2015 年度)において、学科の取り組みを発表する。</p>	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
<p>(1) (ア) すべての層に対する情報提供を行った。</p> <p>(イ) すべてのを 9 月末までに 1 度は行った。</p> <p>(2) (ア) 教科「情報表現額特殊演習 1」および「同 2」の成果を兼ねて、学科学生の企画・撮影・編集による学科紹介ビデオを公開した。http://www3.otani.ac.jp/hi/project/2015pbl-2/</p> <p>(イ) 実行した。</p> <p>(ウ) 実行した。http://www3.otani.ac.jp/hi/zinbunjoho/portal2youtube/</p> <p>(3) 入学センターの支援を受け、実行した。</p> <p>(4) 実行した。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
行動計画のすべてを実行した。しかしながら、入学予定者数は 90 名（3 月 23 日時点）にとどまっております。定員の 100 名には届いていない。	

[改善すべき事項]

昨年度の同時期入学予定者数よりも入学予定者数が有意に増加している。このことから、現在の方向性は地味ながら着実に効果が上がっていると思われる。今後も状況が許す限り、継続的に同様の活動を行っていく方針である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

①人文情報学科オリジナルサイト

<http://www3.otani.ac.jp/hi/project/2015pbl-2/>

②人文情報学科オリジナルサイト（動画紹介ページ）

<http://www3.otani.ac.jp/hi/zinbunjoho/portal2youtube/>

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

行動計画にあげられている項目がすべて実行され、入学予定者数が有意に増加し、数値目標に近づいている。前年度から引き続いての活動の積み重ねがこの結果につながっていると考えられるので、この方向性でさらに取り組みを継続していただきたい。

<自己評定> A

<委員会評定> A

1. 【2015 年度の目標等】

[目標] 演習Ⅰ・Ⅱにおける「読む」「書く」「話す」「聞く」の充実を図る。

基本文献の読解を行い、内容を要約してレジュメにまとめることを通して、読み書きの力を育成する。レジュメに基づいて発表し、質疑応答を行うことを通して、話す聞く力を育成する。上記の活動を通して、幅広い基礎教養を獲得させ、社会的な関心や課題発見的な意識をもつのに必要な素地を準備する。演習Ⅰから演習Ⅱにより高度な形として発展させていく。

[達成基準]

「行動計画」の①～③がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。

[行動計画]

演習Ⅰ・Ⅱともに、以下の①～③を行動計画とする。

- ①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する（読む・書く）。
- ②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する（話す）。
- ③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する（聞く）。

演習Ⅰにおいては、教育学・心理学分野における基礎的な文章を対象とする。演習Ⅱでは、刈谷剛彦『学校って何だろう——教育の社会学入門』（2005）、柏木恵子『子どもが育つ条件—家族心理学から考える—』（2008）を共通のテキストとして、グループで発表箇所を分担し、報告を行う。具体的な行動計画は、演習Ⅰと同じであるが、演習Ⅰよりも発表箇所の分量が多くなり、読解しまとめる力がより高度になる。

2. 【2015 年度の達成状況報告】

演習Ⅰでは、6人の授業担当者がそれぞれ教育学・心理学における基本的な文献を一つずつ選び、6つの文献をまとめたテキストを作成し、授業に用いた。演習Ⅱでは、上記の二冊を共通のテキストとして使用した。それぞれの授業においては、授業担当者が、年度初めの話し合いにより確認した目標・行動計画を常に意識しながら授業を行ったため、行動計画の①②③すべてにわたって学生を支援することができた。例えば「①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する（読む・書く）」については、グループごとに担当発表箇所を決め、発表レジュメが作成できるように支援した。「②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する（話す）」「③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する（聞く）」については、授業内で適宜支援を行った。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

行動計画の①②③について、ほぼすべての学生が、自分なりにチャレンジし、一定の評価が得られる状態であった。①については、最初の授業において担当教員がレジュメの作り方・発表の仕方の見本を示し、次の時間から全員の学生に発表を課したことで効果が上がった。②③については、毎時間、説明の仕方や聞く態度などといった具体的な指導をきめ細かく重ねたことが効果的であった。毎時間の地道な指導により、①～③のすべてに効果が上がった。教員が最初の授業で示した資料例や学生の発表資料、提出レポートを根拠資料として示す。こうした演習Ⅰ・演習Ⅱでの指導が、第3学年・第4

学年の演習Ⅲ・演習Ⅳにおける取り組みにも大きな影響を与えていくものと考えられる。

[改善すべき事項]

行動計画の①～③までを完全に達成できたかという疑問が残る。上手く出来なかった学生たちにどう指導し、第3学年・第4学年での学びにつなげていくかを考慮すべきである。また、クラスの取り組みについての情報交換をして、教育・心理学科全体の共通認識を図るべきである。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

資料1 教員が最初に授業で示した授業資料例（演習Ⅰ）

資料2 教員が最初に授業で示した授業資料例（演習Ⅱ）

資料3 演習Ⅰにおける学生の発表資料

資料4 演習Ⅱにおける学生の発表資料

資料5 演習Ⅱにおける学生の提出レポート

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

演習Ⅰ及び演習Ⅱの授業担当者全員が目標・行動計画を明確に意識しながら、共通テキストを用い、連携して学生たちの「読む」「書く」「話す」「聞く」能力を向上させるという取り組みは高く評価でき、効果を上げていることが根拠資料からも見てとれる。今後は、さらに第3学年・第4学年での学びへと発展させるべく引き続き取り組んでいただきたい。

<自己評定> A	<委員会評定> A
1. 【2015年度の目標等】	
[目標] 教職志望者のキャリアサポート体制の充実をはかる。	
引き続き、1年生・2年生はゼミと「教職学習会」（月イチ開催）で、3年生・4年生はゼミと「教職直前講習」など、教職支援センターやキャリアセンターとも密に連携をとりつつ、学生が自らキャリアデザインに取り組めるよう学年進行に合わせたキャリアサポートを行う。	
[達成基準]	
①～③の行動計画が全て終了したことをもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
①保育士資格認定試験の受験サポート	
②自発的なグループ（教職勉強会など）のサポート	
③教育職員採用試験に関する情報の共有(教職支援センターと)	
2. 【2015年度の達成状況報告】	
行動計画の①～③のそれぞれについて、以下に達成状況を報告する。	
①保育士資格認定試験の受験サポート	
教育・心理学科の学生の中で保育士資格認定試験を受験する者は少数のため、個別の対応となることが多い。以下に各先生方の行ったサポートをあげておく。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ弾き歌い実技の事前指導 ・過去問を対象とした指導（個別指導が多いが、「発達心理学（幼）」の授業においても対応） ・図画工作関係における幼児が扱いやすい材料を使っでの製作実習指導 ・過去問を使っでの絵画指導 ・研究室におけるの個別面接 	
②自発的なグループ（教職勉強会など）のサポート	
<ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業や勉強会が複数行われているため、教室を確保し、指導・助言を行った。 ・昨年度から引き続き行われている「教職科目担当教員による希望者を対象とする定期的な勉強会」の充実（年間を通じて実施、夏休み・春休みなどの長期休暇中にも実施） 	
③教育職員採用試験に関する情報の共有（教職支援センターと）	
<ul style="list-style-type: none"> ・3名の教員が教職支援センターミーティングに参加。直前講習の受講状況・教採受験状況などの情報を学科会議（教職課程初等部会も兼ねる）で報告。 ・サイボウズにおいて、「教育・心理学科について（ご案内・ご依頼等）」「教員採用試験結果について」などのメッセージを教職支援センターと教育・心理学科の教員が共有し情報を共有。 ・1年生、2年生の「教職学習会」における学生への周知とビデオによる記録を教職支援センターと共同で実施。 ・学科教員と教職支援アドバイザーによる直前講習の実施。（個人面接・集団面接・集団討議の練習・模擬授業への指導助言などを実施） 	

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

①保育士資格認定試験の受験サポート

学科教員の共通認識となり、ゼミ担当の学生へのサポートだけではなく、他の学生へのサポートを実施している教員が増えてきている。

②自発的なグループ（教職勉強会など）のサポート

自発的少人数の勉強会の他に、教員の支援も伴った勉強会が軌道に乗り、それぞれの希望にあった勉強会が定着した。

③教育職員採用試験に関する情報の共有（教職支援センターと）

「達成状況報告」にあげたように、様々な情報の共有がなされ、学生に不利益にならないような体制が整ってきた。

[改善すべき事項]

教職をめざして入学してきたが、途中で教職以外の道を選択することになった学生へのキャリアサポートが充分ではない。番号④とも関連するが、途中で進路変更した学生への指導について充分な配慮が必要と考えられる。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

無し。

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

教職志望者のキャリアサポート体制の充実に向けての学科の取り組みは、十分に成果を上げており高く評価できる。個別指導が中心となる保育士資格の受験サポートや学生たちの自主的な勉強会への支援、また、教育支援センターとの連携と学科全体での情報の共有など、学科の教員全員が一致協力して取り組んでいることがわかる。途中で教職を断念した学生に対するその後のキャリア支援の問題は残るが、さらなる充実に向けて引き続き取り組んでいただきたい。

<自己評定> B	<委員会評定> B
1. 【2015 年度の目標等】	
[目標] 心理学コースの学生に対するキャリアサポート体制の充実をはかる。	
昨年度実施した心理学コースの学生の進路・就職調査や支援内容に関するニーズ調査をもとにして、教職をめざさない学生をサポートする体制を充実させる。	
[達成基準]	
行動計画①②の終了をもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
①心理学コースの学生を対象とした進路・就職希望調査、支援内容に関するニーズ調査を行う。	
②教職をめざさない学生のキャリアサポート（キャリアセンターと連携）	
2. 【2015 年度の達成状況報告】	
行動計画の①②のそれぞれについて、以下に達成状況を報告する。	
①心理学コースの学生を対象とした進路・就職希望調査、支援内容に関するニーズ調査を行う。	
昨年度実施した「教育・心理学科心理学コース学生の進路等に関するニーズ調査」が 2 年生から 4 年生までのすべての心理学コース学生を対象としたものであり、本年度実施しても 2 学年がだぶってしまうため、本年度は実施しなかった。来年度への課題としたい。	
②教職をめざさない学生のキャリアサポート（キャリアセンターと連携）	
<ul style="list-style-type: none"> ・「大学生基礎学力調査」を演習 I の時間に全員が受験。「大学生基礎学力調査」の中には、キャリアサポートに関連したものががあるので、それを利用するようにゼミ担当教員から指示した。 ・キャリアセンターの説明会・受験講習などの情報を、演習 I～IV の授業時に逐次伝達。 ・キャリアセンターからの情報に基づき、個人面談を実施したゼミがあった。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
①について	
本年度はニーズ調査を実施しなかったが、昨年度末に実施した調査の結果を踏まえて、就職希望の学生への個人面談を実施、資料に基づく面接ができた。	
②について	
キャリアセンターからの連絡を、ゼミの授業の中で逐次紹介。説明会などに積極的に参加するように促しているため、参加するようになってきたという学生の声が聞かれた。	
[改善すべき事項]	
心理学コースだけではなく、教育学コースの学生のなかで教職をめざさない学生たちへのサポート体制は、まだ充分ではない。ゼミ担当教員の個別指導に終わることなく、学科全体の取り組みにしていくべきである。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
無し。	

<自己点検・評価委員会使用欄>

<所見>

教職志望の学生に対するサポートと比較すると不十分であることは否めないが、心理学コースの学生を中心に教職をめざさない学生のキャリアサポートとして、希望調査に基づいた個別面談や「大学生基礎学力調査」の実施、キャリアセンターとの連携による指導といった取り組みを積極的に行なっていることは評価できる。

[改善すべき事項]にあるように、ゼミ担当教員の個別指導に終わることなく、学科全体としてサポート体制がとれるよう今後も取り組んでいただきたい。